

元号とは何か

五月に改元をひかえるいま、そもそも「元号」とはどのような歴史を持ち、どのように使われ、社会にどのように受け止められ、また時代とともにどう変化しつつあるのかを考えてみたい。

東洋大学研究助手
鈴木洋仁



平成最後

平成最後の年が明けた。

昨二〇一八年を思い起こすと、元号にまつわる二つのトピックスがあった。

ひとつは、この「平成最後」という枕詞だ。これは、二〇一八年の夏、「平成最後の夏」以降、SNS上で静かに流行したものの、あくまでもひっそりとしたものにとどまっている。「平成最後」だからといって、この三〇年間を振り返ったり、自らの人生に思いを馳せたりするきっかけにはなっていない。

そうではなく、あくまでもイベントとしての使用にとどまる。ハロウィンでの大騒ぎのように、その由来や意味を深く考えるのではなく、会話のきっかけとして、平たく言えば「ネタ」と

して「平成最後」は若者を中心に使われている。

もうひとつは、インターネット上での次の元号予測だ。いわゆる「大喜利」のように、さまざまな予想が、今もなお自由に交わされている。改元まで五カ月を切ったものの、すでに予測が枯渇し、ネタ切れになるほど、活発に交わされている。

どちらも、元号をコミュニケーションのツールにしている。乱暴な表現を使えば、元号をネタにして遊んでいる。こうした事態は、昭和末期には全く考えられなかったのではないか。

なぜなら、一世一元もまた元号法で定めており、改元は天皇の「崩御」を意味しているからだ。「次の元号」を語ることは、不敬だとしてタブー視されてきたからだ。とりわけ、昭和末期にはその傾向が強まり、自粛ムードが蔓延していたからだ。

では、元号とは、もともと何だったのか。そして、現代の日本

において、どのような位置付けにあるのか。この小論では、そうした、歴史的な経緯から現在の受け止められ方まで、総論的な解説を試みたい。

元号とは何か

結論を先に言えば、元号は、時代区分のインデックスとして、時間の流れに区切りをつけ、社会の空気をリセットする機能を果たしてきた。これまでの経緯を確かめておこう。

日本の元号は、中国皇帝が時間を支配するという考え方に基づいている。中国では、漢武帝の時代（西暦紀元前一四〇年）の「建元^{けんげん}」からはじまっている（所功『年号の歴史 元号制度の史的研究（増補版）』雄山閣、一九九六年）。

これにならない、日本の元号は六四五年の「大化」にはじまる。そして、一九八九年から続く「平成」まで二四七を数え、七〇一年に制定された「大宝」以来、現在まで一三〇〇年以上、途切れることなく続いている。元号は、朝鮮半島やベトナムでも用いられた時期もあるものの、現在では発祥の地・中国でも使われていない。ひとりの天皇にひとつの元号を限定する「一世

一元」をルールとしている国は、世界中で日本のみだ。

二四七の元号のうち、「昭和」までの二四六個は、最後には天皇が決めていた。武家の権力が天皇よりも強い時代にあっても、形の上では、元号は天皇が決めてきた。その理由は、天皇を、時間の支配者として君臨させてきたからだ。天皇が、時代の呼び方を決めることによって、自らの権威や権力をあらわす記号として元号を使っていたからであり、徳川幕府が支配していた江戸時代においても事態は変わらなかった。

近世史家の藤田覚は、この事態について、「天皇による時間の支配を意味し、天皇による国土と人民の支配・統治を象徴する元号が維持されたことは、現代に至るまで大きな意味を持ち続けた」（藤田覚『江戸時代の天皇』講談社、二〇一一年、一二〇ページ）と解説している。

また、日本の歴史上、天皇は今上天皇に至るまで一二五代だが、改元回数はその約二倍にのぼる。なぜなら、江戸期までは、政治的混乱からの脱出や、自然災害からの復興祈願など、天皇の権力や権威を見せつけるために、代替わりはもちろん、さまざまな理由で改元が行われてきたからだ。

すると、元号を考えるとき、往々にして天皇に引つ張られる。元号そのものの社会的機能や位置づけについて考えるよりも、天皇と元号という関係をメインに置く場合が多い。一世一元をルールとしているからだ。天皇の命は永遠ではなく、いず

すずき ひろひと

一九八〇年東京都生まれ。東京大学大学院情報学専攻博士課程修了。博士（社会情報学）。京都大学総合人間学部卒業後、関西テレビ放送、ドワンゴ、国際交流基金などに勤務。専門は、歴史社会学。著書に『平成』論（書房社）、『元号』と戦後日本（青土社）、共著に『映像文化の社会学』（有斐閣）など。